それぞれの個性を理解し、自立を促す

・事　業　所　名　　　医療法人　高信会　辰元病院
・所　　在　　地　　　宮崎市高岡町飯田 2089 番地 1
・事　業　内　容　　　病院事業（介護、看護医療）
・従　業　員　数　　　１４０名
・うち障害者数　　　　　６名

（内訳）

障害	人数	従事業務
視覚障害	0	
聴覚障害	0	
肢体不自由	1	看護士
内部障害	0	
知的障害	5	清掃業務、洗濯業務
精神障害	0	

・目次　　　　１．事業所の概要
　　　　　　　２．障害者雇用の経緯
　　　　　　　３．取り組み内容
　　　　　　　４．取り組みの効果
　　　　　　　５．今後の展望と課題

事業所外観

１．事業所の概要

医療法人高信会辰元病院は、宮崎市中心地から北西に約 20km の高岡町に位置する。昭和 48 年に宮崎市内に辰元クリニックを開設し、昭和 53 年より現在の高岡町に高岡クリニックとして開設した。そして、昭和 58 年には特例許可老人病院となり、平成 6 年に辰元病院に名称変更し、現在に至る。

現在、辰元病院には、看護・介護とリハビリテーションに重点をおいた医療療養病棟 38 床、長期療養患者で医学的管理が必要な要介護者の入院施設として介護療養型医療施設 145 床がある。辰元グループとしての関連施設には、この他に介護老人保健施設信愛ホーム（定員 80 名）、特別養護老人ホーム裕生園（定員 74 名）、ケアハウスシャトル(定員 50 名)、グループホームたちばな（定員 26 名）、有料老人ホーム宮崎信愛園（定員 40 名）、セントラルキッチンたつもと、養護老人ホーム長寿園（定員 50 名）、有料老人ホームグジブランド（定員 65 名）などあり、高齢者医療・保健・福祉複合施設となっている。

お年寄りのターミナルケアを中心とした病院で、身体の不自由な方がほとんどの介護力強化病院である。あらゆる患者の手となり足となって食事、入浴、排泄介助、洗濯、また処置、医療などが行われている。理念には「今日の一日を奉仕と感謝の心で過ごし、職員として職務と技術の向上に努めます」とあり、寝たきり患者担当の看護婦の介護十則の中には、「自分の親と思い、人間愛に燃え、豊かな心で看護する事」が強調されている。身体の不自由な患者に対して、「人の心」を大切にした職員一体となった取り組みがなされている。

障害者雇用の基本的な考え方には、「知的障害者はあくまでも補助＝手助けが必要であることを頭において、生活全般に関してはなんら健常者と変わらぬ“心の働き”を大切にして、共に喜びも悲しみも、分かち合えるようになりたい」とし、障害者雇用でも「人の心」を大切にした共に分かち合えるための支援が行われている。

２．障害者雇用の経緯

障害者雇用に取り組むようになったのは、宮崎県の国富町にある知的障害者総合福祉施設向陽の里より、体験学習として 2 名の知的障害者を住み込みで受け入れたことによる。

病院には、特別養護老人ホーム同様洗濯場があり昼夜兼行で洗濯、特にオムツや肌着、衣類を洗濯機や乾燥機で洗濯し、たたむ作業がある。短期に受け入れた彼らの体験学習での仕事ぶりは、驚くほど忍耐心があり、忠実でしかも真面目であった。

そのため、当初 2 名を職員として採用することになり、その後も同様に職員として採用し、現在では 5 名（一時 6 名のときもあった）の知的障害者が勤務している。平成 4 年から採用され、ほとんどが現在まで継続して勤務し、勤続年数は 16 年から 18 年になる。各業務内容において熟知しており、今では他の職員に頼られる存在になっている。

なお、看護師の採用については、一般の採用試験と同様に行い、採用されたものである。

３．取り組み内容

給与は日給制で社会保険に加入し、ほぼ全て健常者の職員と同じ取り扱いである。勤務時間は、①7 時～16 時、②10 時～19 時、③12 時～21 時の交代制であり、週 3 日～4 日の勤務日数である。業務内容には、清掃業務と洗濯業務がある。障害者と健常者の区別はな

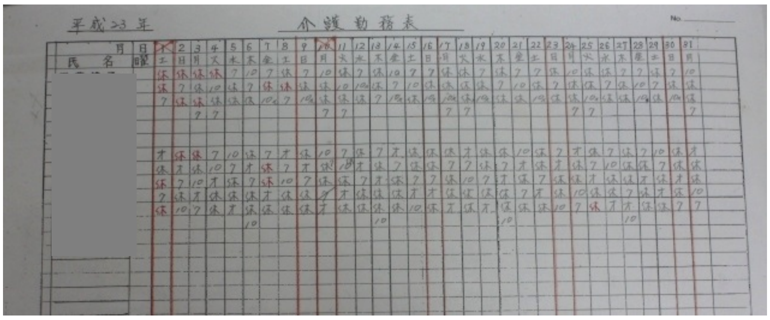
平成23年　介護勤務表

図１　介護勤務表

く、勤務時間は基本的にローテーションとなっている。

ただし、業務内容、勤務時間について、日々の個々の状況に応じた対応がされている。担当職員は障害者と話し合いの場を持ち、障害者のその時々の状況を把握して、障害者にあった適切な業務内容、勤務時間に変更するなど配慮している。これまでの長年の付き合いの中で一人一人の個性を理解しているため、個々に合った適切な判断が可能となっている。実際に使用されている介護勤務表を図１に示す。

作業は、チームを作って行われる。障害者の状況にあった取り組みは、このチーム内でも行われ、チームリーダが障害者の状況にあった受け持ちを指示する。

清掃業務は、玄関、廊下、トイレ、病室のチリ等を片づけることが主である。写真１に清掃用具を示すが、障害者によってはモップのメーカーやストック数などにこだわる人もいる。そのため、その障害者に適応した用具を揃えるよう配慮している。

清掃作業は責任感を持って、非常に丁寧に、確実に行っている。病院内のお年寄りの障害者（患者）と接する機会もあり、しっかりと挨拶することが徹底され、患者への障害者の優しく接する姿も見られる。

写真１　清掃用具一式

洗濯業務は、ヘルパーの持ってくる衣類、布おむつなどを便すすぎ、熱湯消毒し、洗濯機械を用いて洗濯、乾燥、たたみを行う。おむつは、夜用、昼用でそれぞれ異なるたたみ方をする必要があり、熱湯消毒、乾燥等を行うために夏は暑い中での作業になる。写真２に洗濯機械、写真３におむつをたたむ様子を示す。

また、辰元病院では職員アパートが用意されてあり、障害者のうち 3 名は、現在職員ア

写真２　洗濯機械

写真３　おむつたたみの様子

パートに住み込みで働いている。部屋はそれぞれの希望を聞き、部屋割りされている。職員アパートと職場は隣接しており、普段の生活から声かけされ、見守りが行われている。休日は、それぞれ自由な活動時間になっており、バス等を用いて宮崎市街地のデパートへ買い物に行くことが楽しみの一つとなっている。

このような自立した生活ができるために、辰元病院ではいくつかの決まりごとを作って実施している。その一つは無駄使いをしないようにお小遣いの管理、そしてもう一つは外出の際の報告である。写真４に外出記録簿を示すとおり、障害者は行き先と帰りの時間を必ずノートに記入するようになっている。当初は必ず 2 人以上での外出しか認めていなかったが、現在では一人でも行けるようになった。自立を目指したこのような取り組みは、それぞれが責任を持った行動ができることに繋がっており、評価できる。

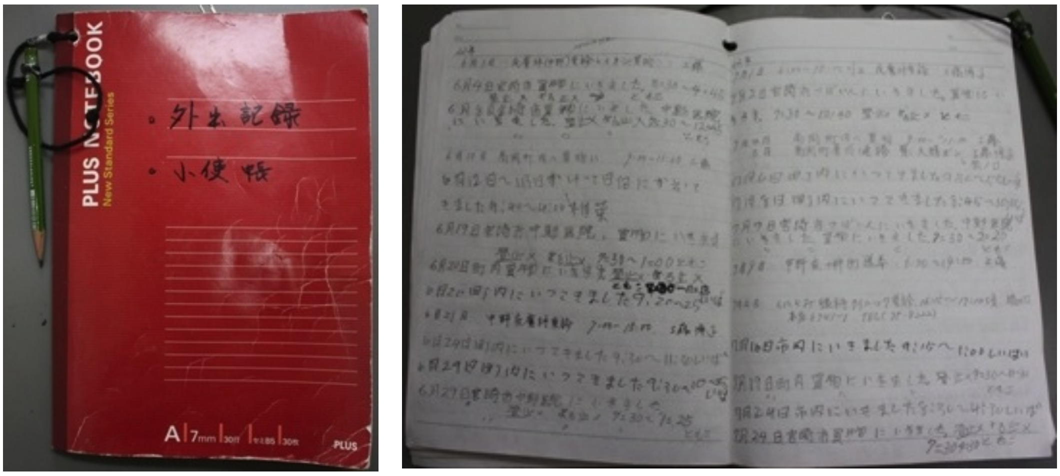

写真４　外出記録ノート

４．取り組みの効果

障害者を雇用しているからといった特別な取り組みをしている意識は職員のほとんどがなく、職員の一人として自然に対応されているということであった。障害者にも当然、その意識はない。職員間の友好を深めるためにこれまでに様々な催し（例えば誕生会、慰安旅行、カラオケ大会、大忘年会など）が企画され、職場以外での職員との繋がりもあって、みんなと打ち解け合っている。現在も年に 2～3 回行われる職員が患者に行う「お楽しみ会」では、職員と一緒に参加し、練習に励んでいる。

病院にはたくさんの職種がある中で、最も地味な仕事を大事に行っている障害者の姿は、職員みんなの信頼を得、みんなの模範にもなっている。遅刻、欠勤はほとんどなく、体調が悪い人がいれば代わってあげ、やさしく、思いやりのあるボランティア精神旺盛なその態度は見習うべきものがある。ひたむきに黙々と働くその姿は、「モクモクちゃん」という愛称で親しまれ、多くの職員に愛されているということである。

自立に向けての取り組みでは、職員アパートを出て、自宅通勤をしている障害者もいる。自宅で炊事、洗濯、掃除をするなど母親代わりをやっているということで、正に独り立ちしていると言ってよい。また、仕事の幅も広がり、ヘルパーの助手ができる障害者もおり、ヘルパーも特別視せず、同僚として一緒に作業ができている。

５．今後の展望と課題

辰元病院は、周りが田んぼに囲まれた田園地帯で、病室からは天ケ城というお城が見える眺めの素晴らしいところにある。患者にとっても気の休まる静かなところである。そうした辰元病院の創始者である前理事長の辰元忠氏は、障害者の雇用に関して非常に関心を持たれた方で、その精神が現在の辰元病院に生きている。冒頭に書いた障害者雇用の基本的な考え方がそれで、「人の心」を大切にした共に分かち合えるための支援となっている。

職員の方への障害者雇用に関しての取材で、「何か取り組みをしていますか？」という問いに対して、「別に何もしていない。」という返答がほとんどであった。障害者の方々に話を聞くと、自分の考えや意見など思ったことを素直に伸び伸びと発言し、職員の方と親しく話されている様子が伺えた。辰元病院の障害者雇用の基本的な考え方にある障害者に対して「あくまでも補助＝手助けが必要」ということを前提に、当たり前のこととして職員の「補助＝手助け」が行われ、それが職員の方の答えとなり、両者のなんら変わらぬ会話を生んでいたのだろう。

福祉の専門家集団である辰元病院は、職場定着するための能力に応じた適正配慮、そして職員と融合した充分な障害者保護、さらに障害者の相談及び組織の充分なフォローを念頭に障害者雇用がしっかりと実践されていることがわかった。

今後の課題には、やはり高齢化である。現在雇用されている障害者の退職後の対応について身元引受人との連絡と協力が必要になってくる。また、長年勤務されている方が多いため、新規の障害者雇用がここ数年は行われていない。現在勤務している障害者と同様に「人の心」を大切にした共に分かち合えるための支援に向けた取り組みが継続して行われることを期待する。

執筆者：宮崎公立大学人文学部国際文化学科　教授　辻　利則